

## 第4回国際ワークショップ報告 アジアにおけるジェンダー — 総括：過去の振り返りと未来の展望— 2007年6月22日（金）・23日（土）

国際基督教大学ジェンダー研究センター（CGS）は、21世紀COEプログラムとの共催で、俱進会、およびUnited Board for Christian Higher Education in Asia（UBCHEA）の後援のもと「アジアにおける人間の安全保障とジェンダー」というテーマで2004年秋から3回にわたり国際ワークショップを開催してきたが、今回はその総括としてのワークショップを6月22日、23日の2日間にわたり行った。その目的は副題にあるようにこれまでのまとめとCGSを拠点としたアジアにおけるジェンダー研究・教育活動の今後の方向性を探ることであった。

これまで行った3回のワークショップの形式は、第1回目のワークショップを企画した大石奈々所員の発案に拠るところが大きい。すなわち3回のワークショップとも参加者は、各分野の専門家を広くアジア各国からつり、各国における女性の地位や、ジェンダー・女性学研究および教育の実態の報告とテーマ別のパネルという2本立ての構成にしてきた。しかし今回はまとめということもあり、これとは異なる形式をとることにした。<sup>1</sup>

今回とった形式は以下の通りである。まずこれまでのワークショップを踏まえたうえでより絞った議論をするために、今回はこれまでに比べ人数を大幅に削り、基本的には招聘者のみの参加をみとめる非公開の会議とした。参加者は、これまでの参加者の中から、自国の状況あるいは狭い専門領域を超えて広く理論的に議論ができることを条件に厳選した結果、海外からはCarolyn I. Sobritchea、湯歴姫（Irene L. K. Tong）、Chutima Pragatwutisarn、李香鎮（Lee Hyangjin）、傅大為（Fu Daiwie）、Bahiya Binti Abdul Hamidの計6名、国内からは秋林こずえ、北原恵、成田伸の計3名を招聘することにした。CGSの所員は田中かず子、Jacqueline H. Wasilewski、生駒夏美、加藤恵津子、Jean-Pierre Bésiat（プロダグムの掲載順、敬称略）とコーディネーターとして御巫由美子が参加した。<sup>2</sup>第1日目には、招聘した参加者それぞれに、あらかじめ各自が参加した過去のワークショップに提出された論文を再読してもらい、それぞれの領域におけるアジア、ジェンダー、「人間の安全保障」（前3回ワークショップの共通テーマ）という視点で何がいえるのかを3つのセッション（社会、人文、自然科学）それぞれにわけて報告してもらった。2日目は、今後のアジアにおけるジェンダー研究の方向性を自由に議論することを目的として午前、午後各2時間ずつのセッションを行った。午前のセッションは「アジアにおけるコロナリズムとジェンダー」について、午後は参加者から討議したいテーマを募りそれにそって議論をするという形式をとった。以下は簡単であるが報告と議論の要点である。

第1日目最初のセッションは、第1回目ワークショップ「アジアにおける人間の安全保障とジェンダー：社会科学の視点から」のまとめとしてSobritchea、湯、秋林3名からの報告があった。Sobritcheaからは改めてフィリピンにおけるジェンダー研究のめざましい進捗状況が伝えられ、湯は現在のアジアで何がおこっているか整理した上で、今後の研究課題としてアジアにおける「市民」の意味を問うことや、国家と協力して政策決定にかかわる「国家的フェミニスト」（state feminists）の役割評価などの具体的な問題点が提示された。また秋林は、沖縄をめぐるジェンダー問題の専門家としての立場より「誰の安全か」ということを問うパラダイム転換を促した。第2のセッションは、第2回目ワークショップ「アジアにおける人間の安全保障とジェンダー：人文学の視点から」を振り返り、生駒の丁寧なまとめと導入のあと、Pragatwutisarnが女性を顕在化させることにより、みえなくなってしまうもの、たとえば年齢、セクシュアリティ、エスニシティ、男性性といった切り口に我々が注意をむけることの重要性を指摘、李は「アジア」という集合的アイデンティティを創出することの難しさと可能性を議論した。第3のセッションは第3回目ワー

ワークショップ「アジアにおける人間の安全保障とジェンダー：自然科学の視点から」を総括し、まず加藤が「自然科学」であっても文化的・社会的構築の側面をもつことを指摘、傳は医療技術が男性よりも女性に対し身体と心を切り離す作用があることを説明した。また成田は、移民の流入とそれに伴うお産文化の変化について述べ、助産師たちとのジェンダー意識の共有の必要性を訴えた。最後に Binti Abdul Hamid が、ジェンダー研究にアジア独自の概念―例えばマレーシアの Fitrah (相互補完性)―導入の必要性を述べた。

2日目の第1セッションは、「アジアにおけるコロニアリズムとジェンダー」というテーマで Bésiat 司会による報告者なしのディスカッションをおこなった。このセッションでは、まず Bésiat がアルジェリアにおいて「コロニリスト」である自分「発見」の経験を話し、つづいて傳が台湾における日本の統治とそれに対する台湾人の考え方について述べるなど、狭義の「植民地主義」という視点がまず語られた。次に、加藤により「心の中のコロニアリズム」(Colonialism of the mind) という広義の視点が提示された。このことからコロニアリズムの視点でもってアジアとジェンダーをかたるとき、コロニアリズムという言葉の多義性・あいまいさが浮かび上がった。それと同時に、定義しないことで、様々な論点が顕在化し多方面にわたる発展的な議論ができた。決して具体的な結論が生まれたとはいえないが、参加者全員による熱のこもった議論は、このテーマがいかにアジアにおいてジェンダーを語る上で中心的なテーマであるかを明らかにしたといえよう。

最後のセッションはアジェンダを設定せず、参加者の希望によりテーマを決定するという予定だった。しかし提案されたテーマが非常に多岐にわたっていたために、テーマをひとつに絞ることをやめ、田中の司会のもと、自由な議論をつづけることにした。まずマレーシアの Ramli (オブザーバー参加) が「心の非植民地化」(Decolonization of the mind) をめぐる具体的な会議の計画を提案、つづいて Pragatwutisarn により「身体之美」の問題が重要なトピックとして提案された。生駒は、現在の日本では新たに西欧化された美の基準が生まれつつあることを紹介、「身体之美」の議論をつづけて、湯や Hassan Basri (オブザーバー参加) は美の定義、再定義といったプロセスにおける力の存在に目をむけることの重要性を指摘した。力の存在と行使の過程は、過去および現在のコロニアリズムとも関係し、今後とも深く追求すべき重要な問題のひとつであることはまちがいない。このセッションの後半は、加藤や Ramli により「国家」と深くむすびつづいている「安全」という言葉のかわりに「安心」やマレー語で安寧、安穩、健康などと広い意味をもつ "selamat/keselamatan" という言葉で「人間の安全保障」を語ることの有用性が提案された。

この他今回のワークショップを通じて多くの重要な問題が提起され議論された。ここにすべてを列記できないのが残念だが、大きな問題として以下3点を記しておきたい。まず第1にこれまでのワークショップで何度も提示され、今回も湯の発表のなかに明らかにされたように、アジアでジェンダーを語る際に宗教を視点に加えることの重要性である。<sup>3</sup> 宗教、とくにイスラム原理主義の台頭は、いまや世界のどこでも無視しえない問題となっており、アジアも例外ではないが、参加者が何度も触れているにもかかわらず今回十分に議論することができなかった。第2は、ワークショップ2日目に顕在化した点として、英語という欧米の言葉をつかってアジアのジェンダーを語ることから派生する問題である。例えば加藤が「安全」ではなく「安心」という言葉を使うことを提案したが、それに似たような言葉として「安寧」「安楽」などという言葉が漢字文化を共有する参加者たちから提案された。アジアをアジアの視点で語る時英語という欧米のフィルターを一旦通過させなくてはならないコミュニケーションの孕む問題点について、今後ひきつづき批判的に考えていかなくてはならない。最後に最も重要な点としては、前回のワークショップのあとに

加藤が『『アジア』というくり』を問題視しているが(『ジェンダー&セクシュアリティ』2006年2号、96ページ)今回も上記したように李、田中その他多くの参加者がアジアを意識し「アジアにおける」ジェンダーを議論することの意味について思いをめぐらせている。この点についても今回十分に議論できなかったことが非常に残念だが、CGSが今後ともアジアを意識してジェンダーを考えるセンターである限りこの問題は常に向かい合わなければならないイシューであり続けるだろう。そして今後「アジア」におけるジェンダーを語る際、今回の会議を通じて Wasilewski が何度もくりかえし訴えていた包括的 (inclusive) な視点を忘れることのないよう、その重要性をここで改めて記し報告を終えたい。

第4回国際ワークショップ コーディネーター 御巫由美子

## Note

<sup>1</sup>2006年秋に第3回ワークショップが終了したあと今回のワークショップまでわずかな時間しかなかったが、幸いなことに多くの人々に支えられ無事4回目の国際ワークショップを終えることができた。特に井上有子、丹羽尊子を始めとする副手・学生スタッフが企画段階から非常に重要な役割を果たした。またいうまでもないことであるがCGSの所員、特に田中かず子所長、そして運営委員である Jean-Pierre Bésiat、生駒夏美、加藤恵津子、Jacqueline H. Wasilewski の尽力なくては今回のワークショップは為しえなかった。この場を借りてCGSの所員、スタッフおよびその他の協力者に心より感謝したい。

<sup>2</sup>ただし北原恵氏は病気のため欠席。これまでの参加者は、それぞれの分野で秀でた研究者・専門家ばかりであったので選択に苦労した。全4回のワークショップにご参加・協力いただいたすべての方にこの場を借りてお礼を申し上げたい。また本文中にも述べたとおり本ワークショップは基本的には外部からの参加を認めない非公開会議であったが、例外として Fuziah Kartini Binti Hassan Basri, Rashila Ramli, 銭煥琦 (Qian Huanqi) 他数名がオブザーバーとして参加した。

<sup>3</sup>この点は会議終了後に書記の Anya Benson からも指摘された。

[本ワークショップの成果集として『アジアから視るジェンダー (ICU 21世紀 COE シリーズ 第7巻)』(田中かず子編、風行社)が発刊されました。]

CGS 関連書籍 発刊のおしらせ



# アジアから見る ジェンダー

ICU 21世紀 COEシリーズ 第7巻  
(全9巻, 2008年4月 完結予定)

編者：田中かず子 発行所：株式会社 風行社 2008年1月発行 定価：本体 2,300円+税  
ISBN：978-4-86258-011-5

ICUジェンダー研究センター (CGS) は、ICUの21世紀 COE プロジェクト「平和・安全・共生」の一環として、2004年から2007年にかけて、国際ワークショップ「アジアにおける人間の安全保障とジェンダー」を開催してきた。本書は、新しい知の地平をアジアから拓くことを目標としてきたCGSが、アジアの研究者と活動家のコラボレーションのもと、「人間の安全保障」をジェンダーの視点から語ってきた、4年間に渡るワークショップの集大成である。

本書の第I部から第III部には、第1回から第3回までのワークショップがまとめられ、各回の総括と発表論文で構成されている。第IV部では、3年間の総まとめとなる第4回ワークショップでの座談会の模様を抜粋、収録した。



## 【本書目次より】

ジェンダー、貧困、フィリピン経済 — 変化の潮流と展望  
ジェンダーと人間の安全保障 — アジアから  
話してはいけないことに名前を — タイ文学のレイプ表象  
性とセクシュアリティの表象 — 母への鎮魂歌  
日本の商業アニメにおける女性像の変遷と「萌え」文化 — 新しいジェンダーを求めて  
日本の美術界とジェンダー  
〈身体の知〉・医学・ジェンダー — 疎外と管理を超えるために  
男子への性教育 — その重要性と課題  
座談会 アジアにおけるジェンダーと「脱・植民地化」 ほか

## International Workshop 2007: Human Security and Gender in Asia - A Roundup: Looking Back/ Looking into Our Future Friday June 22 - Saturday June 23, 2007

Since 2004, the ICU Centre for Gender Studies (CGS) and the 21st Century COE Program have co-hosted three international workshops on “Human Security and Gender in Asia,” with the support of UBCHEA (United Board for Christian Higher Education in Asia) and Gushinkai. Last June, we held a two-day workshop to bring together the achievements of the previous workshops and to explore the future role and directions of CGS-based gender studies and educational practices in Asia.

The previous workshops had followed a format laid out by CGS member Nana Onishi who organised the first of the series -- each workshop consisted of presentations by Asian researchers on topics such as the social status of women and the present state of gender, women's studies, and education in their respective countries, followed by panel discussions on specific topics. However, for this final workshop, we proposed a different format for the purpose of wrapping up the series.

This time we opted for a small, invitation-only program in order to focus on furthering debates from where they were left off at the previous workshops. The selected participants were those who had taken part in the previous sessions and whom we felt were capable of seeing beyond the constraints of their own national concerns or research fields, and engaging in wider, theoretical discussion. In total, nine guests were invited; Carolyn I. Sobritchea, Irene L. K. Tong, Chutima Pragatwutisam, Lee Hyangjin, Fu Daiwie and Bahiya Binti Abdul Hamid from overseas, and Kozue Akibayashi, Megumi Kitahara, and Shin Narita from Japan. In addition, Kazuko Tanaka, Jacqueline H. Wasilewski, Natsumi Ikoma, Etsuko Kato, Jean-Pierre Bésiat and Yumiko Mikanagi (co-ordinator) participated from CGS (names are ordered as they appear in the program; titles are omitted). The first day was organized in three separate sessions - social science, humanities, and natural science. The presenters reread their papers from previous workshops to re-examine and report on their respective fields from the common perspectives of the workshop series, that is, Asia, gender, and human security. The second day was devoted to the free exchange of opinions on future directions for gender studies in Asia. It began with a two-hour morning session focusing on

"Colonialism and Gender in Asia," followed by a two-hour afternoon session reserved for open discussion on topics proposed by the participants. The following is a brief summary of the proceedings.

For the first session on day 1, reports were presented by Sobritchea, Tang, and Akibayashi to assess the achievements of the first workshop, "Human Security and Gender in Asia: Social Science Perspectives." Sobritchea detailed the remarkable progress of gender studies in the Philippines, Tang summarized recent movements in Asia as a basis for to propose further research on the meaning of "citizens" in Asia and the role of "state feminists" in establishing national administrative policy, and Akibayashi, as a specialist in Okinawan gender issues, proposed a paradigmatic shift to the question of "whose security?" In the next session, we looked back on the second workshop, "Human Security and Gender in Asia: Humanities Perspectives." Following Ikoma's detailed summary and introduction, Pragatwutisarn pointed out the importance of recognizing aspects such as age, sexuality, ethnicity, and masculinity that have been rendered invisible with the foregrounding of women and femininity. Lee focused on the difficulty and the potential of creating a collective "Asian" identity. In the final session to summarize the third workshop "Human Security and Gender in Asia: Natural Science Perspectives," Kato asserted the cultural and social construction of "natural science," while Fu explained how medical technology has more of an effect on women than on men, in terms of severing the mind or heart from the body. Narita reported on the influx of immigrants and the changing maternity culture associated with it, to stress the necessity of sharing gender awareness with midwives. Lastly, Binti Abdul Hamid discussed the necessity of introducing ideas unique to Asia, such as *Fitrah*, the Malaysian system of mutually complementary relationships.

The morning session of day 2, featured a round-table discussion on "Colonialism and Gender in Asia" with Bésiat as chair. Specific topics on colonialism were first introduced -- Bésiat spoke about his experience of self-discovery as a "colonialist" in Algeria, and Fu reviewed the Japanese occupation of Taiwan during the Second World War and Taiwanese attitudes towards it. Kato then introduced a broader framework in terms of the "Colonialism of the mind." This highlighted the diversity and ambivalence of "colonialism" as a perspective from which to discuss gender in Asia. Avoiding the constraints of a strict definition also enabled the flood of diverse, constructive debates

that followed. While it did not give rise to any conclusive agreements, the passionate debates by all participants was firm testimony to the centrality of this issue in discussions of gender in Asia.

Originally, there was no set agenda for the final session, in order to introduce themes based on the proposals from the participants. Due to the range and diversity of the proposals, however, we decided not to limit our discussion on one topic, but instead to continue free discussion with Tanaka as chair. Ramli from Malaysia (an observer) proposed a plan for a conference on the theme of colonialization of the mind and Pragatwutisarn proposed "bodily beauty" as an important topic to consider. Ikoma then referred to a new Westernized aesthetic standard developing in Japan today. Tang and Hassan Basri (an observer) pointed to the importance of considering the existence of a power structure which is involved in the process of defining and re-defining aesthetic ideals. The existence and exercise of a power structure have a direct relation to both past and present colonialism; as such, it is undoubtedly an issue to be pursued in future research. At the end of this session, Ramli and Kato proposed that in discussing "human security," words such as "安心" (*anshin*, relief) or Malayan "selamat/keselamatan" (comfort/health) may be more appropriate than "peace", which is inseparable from the notion of "state."

Regrettably, it is not possible to record all the important topics raised during this workshop here, but I will highlight the following three points of importance. Firstly, the importance of incorporating a religious perspective in thinking about gender in Asia was repeatedly pointed out in previous workshops and again on this occasion by Tang in her presentation. The growing influence of religion, especially Islamic fundamentalism, is becoming an issue of global importance one cannot ignore anywhere in the world today -- Asia is no exception as many participants have pointed out, but we were unable to cover this topic fully. The second issue is the problems involved in the use of English, a Western language, as a medium for the discussion gender in Asian. This surfaced on the second day of the workshop; when Kato proposed the adoption of "安心" (*anshin*) instead of "安全" (*anzen*) and other participants who share the common culture of Chinese characters were able to suggest similar words such as "安寧" (*an'nei*) and "安樂" (*anraku*). We must continue to critically evaluate this communication problem, of using English, a filter of Western culture, in discussing Asia from Asian perspectives.

The last and most important point had already been voiced by Kato following the third workshop; the meaning and problem of distinguish “Asia” or “Asian” (Gender and sexuality, 2: 60, 2006). In this workshop, Lee, Tanaka and other participants again engaged in the implications of discussing “Asian” gender with an “Asian” awareness. Again, we were unable to fully develop the debate at this workshop, but it is certainly an issue which we will continue to face as long as CGS functions as a centre for gender dialogues with Asia in view. To conclude this brief report, I wish to reiterate an opinion repeatedly expressed by Wasilewski, that we should neither neglect nor forget an inclusive viewpoint in discussions of gender in Asia.

**Yumiko MIKANAGI**

**Coordinator, 4th International Workshop, 2007**

<sup>1</sup>It had not been long since the last workshop in Autumn 2006 and this workshop owes its success to the support of many people. I would like to express my deep gratitude to all those who made this workshop possible, especially the assistants and student staff members at CGS lead by Yuko Inoue and Takako Niwa who played a crucial role from the initial stages of preparation. I also wish to thank the CGS members, especially director Kazuko Tanaka and the organizing committee members Jean-Pierre Bésiat, Natsumi Ikoma, Etsuko Kato, and Jacqueline H. Wasilewski.

<sup>2</sup>Megumi Kitahara was unable to attend for health reasons. Screening the previous participants for this session was a difficult process as they were all renowned scholars or experts in their respective fields. While it was in principle an invitation-only event, exceptions were made to admit some observers, including Fuziah Kartini Binti Hassan Basri, Rashila Ramli, and Qian Huanqi. I wish to thank all those who attended this series of four workshops for their participation and contribution.

<sup>3</sup>Anya Benson who served as a secretary also pointed to its importance afterwards.